

運動遊びの指導力に対する模擬保育実践の効果

大石 祥寛 倉岡 豊実

A simulated childcare practice enhances the instructing ability of physical activity play

Yoshihiro OISHI Toyomi KURAOKA

要旨：

本研究は、「運動発達を促す、安全で楽しい運動遊び」の指導力向上を目標に掲げた模擬保育の実践が、保育者養成校の学生の運動遊びの指導力に及ぼす影響を明らかにすることを目的とした。小児体育の授業に模擬保育を導入し、模擬保育実践者の振り返りおよび学生の相互学習の充実を促した。保育科 2 年生 65 名に対する質問紙調査の結果から、自分の模擬保育の実践によって運動指導への理解を深め、他者の模擬保育を通して運動発達を促す運動指導、安全確保への配慮、コミュニケーションの取り方への理解を深めるといった学習効果がある可能性が示された。また、模擬保育を通して、運動遊びの指導における運動指導、コミュニケーション、安全管理に対する自己評価の向上が見られ、特に、運動指導および安全管理の向上率が高かった。これらのことから、「運動発達を促す、安全で楽しい運動遊び」の指導力向上を目標に掲げた模擬保育の実践は、保育者養成校の学生の運動遊びの指導力向上に寄与し、幼児が「多様な動き」および「安全についての構え」を身に付けるための保育実践の一助を担える可能性が示された。

キーワード：領域「健康」、運動発達、コミュニケーション能力、安全管理

I. 緒言

幼児にとって心身全体を働かせて運動することは、心と身体の発達だけではなく、生涯にわたる健康の維持・増進にとって重要である（文部科学省, 2012a）。それにも関わらず、今日では、幼児を取り巻く社会環境や人々の生活様式の変化によって子どもの運動遊びの時間や環境が減少しており（文部科学省, 2012a）、子どもの体力・運動能力は、体力水準が高かった昭和 60 年頃と比べると依然として低い水準にある（スポーツ庁, 2012）。また、幼児が体現する基本的な動きの種類の減少や基本的な動きの質的低下が見られるとの示唆（杉原・河邊, 2016, p.67）や、体の操作ができなければ重大な事故に繋がる可能性があるとの示唆が存在する（春日, 2017）。平成 29 年 3 月に改訂された幼稚園教育要領では、領域「健康」の内容の取扱いの中に、「多様な動きを経験する中で、体の動きを調整するようにすること」（内容の取扱い(2)）および、安全に関する指導の記述（内容の取扱い(6)）が新たに加えられた（文部科学省, 2017）。これらのことから、運動遊びの機会を提供する立場にある保育士、幼稚園教諭あるいは保育教諭は、子どもが「多様な動き」および「安全についての構え」を身に付けられる運動遊びを指導できることが求められると言える。

しかしながら、実際に保育現場では、若い保育者が遊びの経験が少なく、遊び方を知らないといった問題や運動遊びの指導が表面的、形式的、通り一遍であるために遊びが深まらないといっ

た問題（池田，2015）があるとされている。したがって、これから幼児の運動遊びに携わる保育士、幼稚園教諭あるいは保育教諭が、幼児の「多様な動き」および「安全についての構え」の体得に貢献できるような運動遊びの指導力を身につけられるように、保育者養成校の学生に対する指導方法を検討することは急務と言えよう。

これまでに、運動遊びの指導に対する模擬保育の教育的効果がいくつか示されている（森谷・清水，2006；坂口，2017；櫻木，2016；矢野・原田，2010）。櫻木（2016）は、「保育内容・健康」に模擬保育形式の運動遊びを導入することによって、学生が運動遊びに関わる学びだけではなく、保育者の援助に関わる学びや気付きを得たと報告している。また、運動遊びを用いた模擬保育の実践による学習効果は、5領域のうち「健康」および「人間関係」に対して高い可能性が示されている（坂口，2017）。しかしながら、運動遊びの指導力に対する模擬保育の実践の効果に関しては不明な点が多い。

そこで本研究では、領域「健康」関連の教科である「小児体育」の授業における模擬保育の実践が運動遊びの指導力に及ぼす影響について、運動遊びの指導力に対する学生の自己評価の変化から検討することを目的とした。また、模擬保育による学習効果には教員による模擬保育の設定も重要となることが示唆されていること（坂口，2017）を踏まえると、運動遊びの指導力を高める上で模擬保育の目標設定が重要と考えられるため、本研究における模擬保育では、「運動発達を促す、安全で楽しい運動遊び」の指導力向上を目標に掲げて実践した。

II. 研究方法

1. 対象者

宮崎学園短期大学保育科の2学年のうち、筆頭著者が授業を担当する2クラスの67名（女子64名、男子3名）を対象とした。

2. 模擬保育の内容

模擬保育の実践は、保育科2年の後期開講の小児体育Ⅱの授業に導入した。

1) 模擬保育の導入までの運動遊びの実践

本研究では、幼児期の運動指導に携わる前に運動遊びに対して理解することと、遊び経験を蓄積することが重要であるとの示唆（池田，2015）を踏まえて、模擬保育の実践前である2年次前期に開講した「小児体育Ⅰ」の授業内にて、運動遊びの実践を導入した。運動遊びの内容は、「歩く」、「走る」、「跳ぶ」、「投げる」、「回る・逆さになる」、「蹴る」の動作を主としたものであった。学生には、心身全体を働かせて運動遊びを実践するように伝えた。また、運動遊びの実践の際は、運動遊びの指導の目的および指導の要点を合わせて教授した。

2) 模擬保育の目的と目標

本研究では、運動遊びに関する模擬保育の進め方に関する講義を実施した際に、模擬保育の目的と目標を対象学生に示した。模擬保育の目的は、「運動遊びに関する保育の環境構成および具体的展開のための指導技術を身に付けること」、模擬保育の目標は、「運動発達を促す、安全で楽しい運動遊びの指導力を向上させること」と定めた。

3) 模擬保育の設定

模擬保育は、運動場で実施した1回を除き、残りはすべて体育館にて実施した。模擬保育で利用できる体育館の広さは28 m×16 mであった。模擬保育は同じクラスの学生15名程度を対象に、25分程度実践するよう設定した。運動遊びの指導を1人で実施する場合、安全が担保されない可能性があるため、当日模擬保育を実践する学生が2人1組になって、1人の学生が運動遊び

の指導の立案と主の指導は行うが、ペアの1人は指導の補助に入ることとした。なお、模擬保育実践前には予め指導案を作成するよう指示をした。指導案作成の際は、何の動きに焦点をあてて運動遊びの指導を行うかについて思考することと、安全の確保に配慮をすることを指示した。学友の模擬保育に子ども役で参加する学生は、子どもになりきって運動遊びを実践しながらも、担当者の模擬保育の運動内容や進行について評価するように指示をした。模擬保育実践後は実践者に対して、運動遊びの指導のねらいおよび内容、そして、何の動きの運動発達を促す運動遊びの内容であったのかを、ホワイトボードに記入させて、参加者全員で運動遊びの指導内容を共有する時間を設けた。なお、該当学生は全員、模擬保育実践の期間中に保育実習Ⅱを行った。

4) 相互学習の促進

本研究では他者の模擬保育の実践からの学びを深めるために、他者の模擬保育に対して「運動発達を促す、安全で楽しい運動遊び」の観点から評価(図1)をするとともに、授業ノートを活用して他者の模擬保育の内容および感想や意見を記入させた。

5) 模擬保育の振り返り

自分の模擬保育の振り返りによる学習効果を高めるために、模擬保育に参加した学生による評価票(図1)の「良かった点・工夫されていた点」および「改善点・意見」だけを模擬保育実践者にフィードバックをした。そして、模擬保育実践者には後日、模擬保育の振り返りのレポートを提出させた。振り返りレポートの内容は、①模擬保育実践者が感じたこと、②模擬保育参加者からの「良かった・工夫されていた」との意見のまとめ、③授業参加者からの「改善点・意見」として指摘されたことのまとめ、④次の運動遊びの指導に向けて検討しておきたいこと、⑤運動遊びの指導力を高めるために今の自分に必要なことの5つであった。

評価票()月()日()さんの発表

()クラス()番 氏名()

【1:全くそう思わない 2:わずかにそう思う 3:ある程度そう思う 4:かなりそう思う 5:非常にそう思う】

評価内容	評価
子どもの運動発達を促すことができる運動遊びの指導内容であった	
運動指導中の補助, 観察の仕方, 状況に応じた運動内容の変更などは適切であった	
言語的コミュニケーション(声の大きさ・早さ・高さ, 発言の内容・タイミング・間のおき方など)は適切であった	
非言語的コミュニケーション(視線, 姿勢, 表情, うなずき, 距離感, 振る舞い, ジェスチャー)は適切であった	
環境や用具などを事前に確認して危険を回避するなど, 安全確保に努めていたと感じる	
運動指導中の安全を確保するための配慮(子どもへの安全指導, 監視・補助体制など)は適切であった	
子どもの興味や関心を引き付ける楽しい運動(運動の指導内容も含めて)であった	
良かった点・工夫されていた点	改善点・意見

図1 模擬保育の評価票

3. 調査方法

1) 調査期日

調査は、模擬保育の進め方に関して説明した授業（模擬保育実践前）と、模擬保育の振り返りを行った授業（模擬保育実践後）の時間使い、直接記入法による質問紙調査を実施した。なお、すべての質問紙に記入した 65 名の調査結果を分析の対象とした。

2) 調査内容

運動遊びの指導に関する模擬保育の効果を検証するため、運動遊びの指導力に関する質問紙調査と、模擬保育の学習効果に関する質問紙調査を実施した。運動遊びの指導力に関する質問紙は模擬保育の実践前後に、模擬保育の学習効果に関する質問紙調査は模擬保育の実践後に実施した。運動遊びの指導力に関する質問紙は、運動指導の保育実践力に重要であると考えられる質問項目を「小児体育」の授業担当者 2 名で検討し、①運動指導に関する項目 10 問、②コミュニケーションに関する項目 10 問、③安全管理に関する項目 10 問の計 30 問で構成した。そして、それぞれの項目を①「運動指導力」、②「コミュニケーション力」、③「安全管理力」と定義した。模擬保育の学習効果に関する質問紙は、自己の模擬保育に関する項目 3 問、他者の模擬保育に関する項目 3 問の計 6 問で構成した。回答方法はすべて 5 段階尺度を用いて回答を得た。なお、運動遊びの指導力に関する質問紙調査では、高い保育実践力を持った保育者、あるいは自分が目標とする保育者の能力に対し、今の自分がどの程度の能力を有しているのかという観点から自己評価するように指示をした。

4. 統計処理

運動遊びの指導力に関する質問紙（5 段階評価）の結果は、平均値と標準偏差で示した。運動指導力に関する質問紙のうち①運動指導力、②コミュニケーション力、③安全管理力は 50 点満点（10—50 点）で評価をし、2 要因（質問項目×前後）分散分析を行い、交互作用および主効果を検証した。さらに、「自分の実践した模擬保育に満足しているか」との質問に対して「非常にそう思う」、「ある程度そう思う」、「かなりそう思う」のいずれかに回答した学生の群（以下「模擬保育の満足度上位群」と略す）と「全くそう思わない」あるいは「わずかにそう思う」と回答した学生の群（以下「模擬保育の満足度下位群」と略す）に分けて、運動指導力、コミュニケーション力、安全管理力のそれぞれの変化について 2 要因（群×前後）分散分析を行った。2 要因分散分析の前は、Shapiro-Wilk 検定と Box の M 検定あるいは Levene 検定を用いて正規分布および等分散を確認した。交互作用が有意であった場合は、単純主効果の検定を行った。運動指導力、コミュニケーション力、安全管理力の質問項目別の模擬保育実践前後の比較には、Wilcoxon の対応のある符号順位検定を用いた。本研究では有意水準を 5%未満とした。すべての検定は統計ソフト IBM SPSS Statistics 24 (IBM 社) を用いた。

5. 倫理的配慮

本研究にあたっては予め本研究の趣旨を十分に説明した。その際に、質問紙調査の結果が授業の成績に影響しないことに加えて、調査結果の公表の際は統計的な処理を行うため個人が特定されないことを伝えた。

Ⅲ. 結果

1. 模擬保育の実践による学習効果

表 1 に模擬保育実践の学習効果の結果を示した。模擬保育に対する満足度は全体として低く、「全く満足していない」と回答した学生が 23.1% (15 名)、非常に満足していると回答した学生が

0%(0名)であった(表1の①)。また、自分が模擬保育を実践したことによる運動遊び指導への理解度(表1の②)および、運動遊びの指導に対する自己効力感(自信)(表1の③)は、向上したと自覚した学生がほとんどであったが、運動遊びの指導への理解度が自己効力感よりも学習効果が高い傾向を示した。他者の模擬保育実践による学習効果(表1の④⑤⑥)は、安全確保への配慮、運動発達を促す運動指導、コミュニケーションの取り方、いずれも高い回答を得た。

表1 模擬保育実践の学習効果

【自己の模擬保育実践による学習効果】	回答数(人)				
	1	2	3	4	5
① 自分の実践した模擬保育に満足している	15	19	25	6	0
② 学友の意見や自己の振り返りを通して、運動指導についての理解を深めることができた	0	4	21	35	5
③ 模擬保育を実践してみて、運動指導に対する自信が高まった	3	18	30	14	0
【他者の模擬保育実践による学習効果】	回答数(人)				
	1	2	3	4	5
④ 学友の模擬保育に参加して、安全確保への配慮に対する理解を深めることができた	0	4	17	42	2
⑤ 学友の模擬保育に参加して、運動発達を促す運動指導について理解を深めることができた	0	6	24	31	4
⑥ 学友の模擬保育に参加して、コミュニケーションの取り方について理解を深めることができた	0	4	16	34	11

1: 全くそう思わない, 2: わずかにそう思う, 3: ある程度そう思う, 4: かなりそう思う, 5: 非常にそう思う

2. 運動遊びの指導力の変化

図2に運動指導力、コミュニケーション力、安全管理力に対する自己評価の模擬保育実践前後の変化を示した。質問紙調査の2要因分散分析の結果、交互作用(実践前後×質問項目)が認められた($F = 5.019, p < 0.01, \eta^2 = 0.073$)。その後の単純主効果の検定の結果、模擬保育実践前は、コミュニケーション力と運動指導力および安全管理力の間には有意な差が認められた($p < 0.01$)。模擬保育の実践前後の変化では、運動指導力、コミュニケーション力、安全管理力のいずれも模擬保育実践後が実践前より有意に高かった($p < 0.001$)。模擬保育実践後は、質問項目間で有意な差は認められなかった。

本研究では、自分の模擬保育に対する満足度の上位群と下位群に分けて運動指導力、コミュニケーション力、安全管理力の変化を比較した。その結果、安全管理力において有意な交互作用(実践前後×群)が認められた($F = 4.744, p < 0.05, \eta^2 = 0.070$)。その後の単純主効果の検定の結果、模擬保育実践前での有意な差はないが、模擬保育実践後において上位群が下位群より有意に高い値を示した($p < 0.05$)。また、両群ともに模擬保育実践による有意な向上が認められた($p < 0.001$)。運動指導力、コミュニケーション力には交互作用の有意性は認められなかったが、模擬保育実践前後の主効果が有意であった(運動指導力: $F = 127.580, p < 0.001, \eta^2 = 0.669$, コミュニケーション力: $F = 68.446, p < 0.001, \eta^2 = 0.521$)。運動指導力、コミュニケーション力のどちらも、群における主効果は認められなかった。

表3、表4、表5にそれぞれ、運動指導力、コミュニケーション力、安全管理力の項目毎の変化を示した。すべての質問項目において、模擬保育実践による有意な向上が認められた($p < 0.001$)。運動指導力では、「①運動発達を促す運動プログラムの立案・指導ができる」、「⑩必要に応じて、適切な模範を示すことができる」の変化量が大きく(表3)、コミュニケーション力では「④発言のタイミングや間のおき方がちょうど良い」(表4)、安全管理力では「⑤危険防止のための監視救護体制を整えることができる」(表5)の項目の変化量が大きかった。

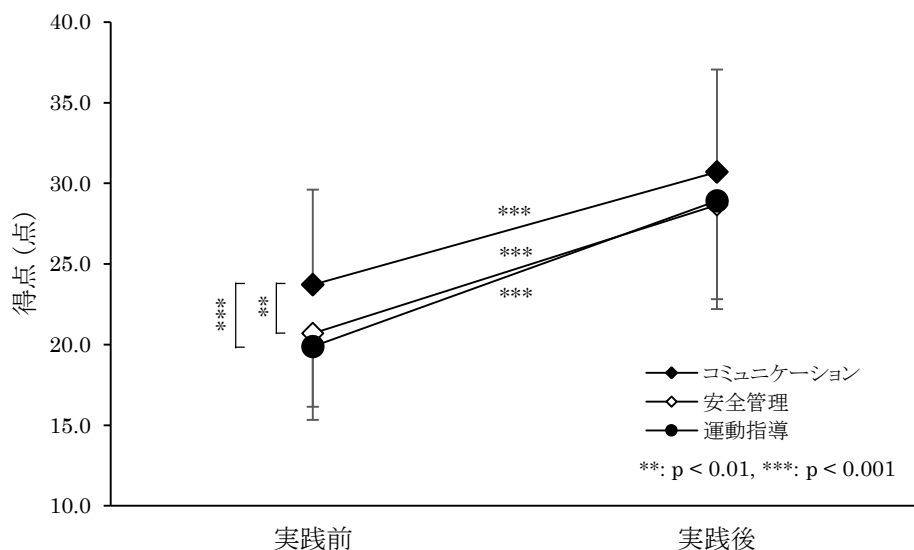


図 2 運動遊びの指導力に対する自己評価の変化

表 2 模擬保育に対する満足度別に見た運動遊びの指導力の変化

	上位群		下位群		交互作用	主効果(群)	主効果(前後)
	実践前	実践後	実践前	実践後	F	F	F
運動指導	20.3 ± 4.3	30.6 ± 5.2	19.5 ± 4.8	27.3 ± 6.6	2.474	3.939	127.580 ***
コミュニケーション	23.7 ± 3.8	32.3 ± 5.7	23.7 ± 5.1	29.2 ± 6.2	3.126	1.613	68.446 ***
安全管理	20.8 ± 6.5	30.3 ± 6.4	20.9 ± 5.8	27.2 ± 6.2	4.744 *	1.784	117.982 ***

平均値±標準偏差
 *: p < 0.05, ***: p < 0.001

表 3 運動指導力に対する自己評価の変化

質問項目	実践前	実践後	変化量
① 運動発達を促す運動プログラムの立案・指導ができる	1.7 ± 0.7	2.9 ± 0.7 ***	1.2 ± 1.0
② こころの発達を促す運動プログラムの立案・指導ができる	1.5 ± 0.6	2.5 ± 0.8 ***	1.0 ± 0.9
③ 運動指導に当たる前に入念な準備ができる	2.3 ± 0.8	3.2 ± 0.7 ***	0.9 ± 0.9
④ 子どもの運動技能を正確に評価できる	1.8 ± 0.7	2.6 ± 0.9 ***	0.7 ± 1.1
⑤ 運動中の子どものこころの状態や変化を正確に把握できる	2.2 ± 0.7	2.8 ± 0.8 ***	0.6 ± 1.0
⑥ 状況に応じて、運動指導中に適切な言葉掛けができる	2.4 ± 0.6	3.1 ± 0.7 ***	0.7 ± 0.8
⑦ 状況に応じて、運動指導中に適切な運動課題を設定できる	1.8 ± 0.6	2.6 ± 0.7 ***	0.9 ± 1.0
⑧ 状況に応じて、運動指導中に適切な補助(身体接触を伴うもの)ができる	2.1 ± 0.6	2.9 ± 0.7 ***	0.8 ± 0.9
⑨ 運動指導中、適切な位置にいて常に子どもの様子を観察できる	2.3 ± 0.6	3.1 ± 0.8 ***	0.8 ± 1.0
⑩ 必要に応じて、適切な模範を示すことができる	1.8 ± 0.7	3.0 ± 0.8 ***	1.2 ± 1.1

平均値±標準偏差
 *** p < 0.001: 実践前vs実践後

表 4 コミュニケーション力に対する自己評価の変化

質問項目	実践前	実践後	変化量
① 子どもに対する発言の内容が良い	2.1 ± 0.7	2.8 ± 0.7 ***	0.7 ± 0.9
② 声の大きさや高さがちょうど良い	2.5 ± 0.9	3.2 ± 0.9 ***	0.7 ± 1.1
③ 話すスピードがちょうど良い	2.2 ± 0.8	3.0 ± 0.9 ***	0.8 ± 1.2
④ 発言のタイミングや間のおき方がちょうど良い	1.9 ± 0.7	2.8 ± 0.8 ***	0.9 ± 1.1
⑤ 子どもに対する視線がちょうど良い	2.4 ± 0.8	3.1 ± 0.8 ***	0.7 ± 1.1
⑥ 子どもとの関わりの中でのジェスチャーや姿勢が適切である	2.5 ± 0.8	3.0 ± 0.8 ***	0.5 ± 1.1
⑦ 子どもに対する振る舞いやうなずきが適切である	2.5 ± 0.7	3.2 ± 0.7 ***	0.6 ± 0.9
⑧ 子どもとの関わりの中での表情が豊かである	2.6 ± 0.9	3.3 ± 0.9 ***	0.8 ± 1.1
⑨ 子どもとの身体的な距離感がちょうど良い	2.5 ± 0.7	3.1 ± 0.8 ***	0.6 ± 1.0
⑩ 子どもに対する身体的な接触が適切に行える	2.5 ± 0.8	3.0 ± 0.9 ***	0.6 ± 1.3

平均値±標準偏差

*** p < 0.001: 実践前vs実践後

表 5 安全管理力に対する自己評価の変化

質問項目	実践前	実践後	変化量
① 会場および用具の安全を事前に入念にチェックし、危険を回避できる	2.4 ± 1.3	3.0 ± 0.8 ***	0.6 ± 1.5
② 場所、用具、天候等の危険性を事前に予測し、危険を回避できる	2.1 ± 0.7	2.9 ± 0.8 ***	0.9 ± 1.0
③ 子どもの危険な動きを事前に予測し、危険を回避できる	1.9 ± 0.6	2.8 ± 0.8 ***	0.8 ± 0.9
④ 運動実施の可否に関わる情報を事前に確認し、危険を回避できる	2.1 ± 0.7	2.9 ± 0.8 ***	0.8 ± 1.1
⑤ 危険防止のための監視救護体制を整えることができる	1.6 ± 0.6	2.6 ± 0.8 ***	1.0 ± 1.0
⑥ 運動中、子どもに危険が及ぶと判断した場合、適正な対応が取れる	1.9 ± 0.8	2.7 ± 0.7 ***	0.8 ± 0.9
⑦ 必要に応じて、子どもに対して安全指導や安全教育ができる	2.1 ± 0.7	2.8 ± 0.8 ***	0.7 ± 1.0
⑧ 運動指導中に事故や怪我が起こったとしても、適正な対応が取れる	1.7 ± 0.6	2.5 ± 0.8 ***	0.8 ± 0.9
⑨ 子どもの体調等を事前に確認して、必要に応じて適切な対応ができる	2.3 ± 0.7	2.8 ± 0.8 ***	0.5 ± 0.9
⑩ 自己の健康管理が徹底している	2.7 ± 0.9	3.6 ± 0.9 ***	0.9 ± 1.2

平均値±標準偏差

*** p < 0.001: 実践前vs実践後

IV. 考察

1. 模擬保育の実践による学習効果

本研究の結果、模擬保育を実践することによって運動遊びの指導に対する理解は深まり、自己効力感（自信）が高まったものと考えられる（表 1）。特に、運動遊びの指導に対する理解の深まりが大きかったと考えられる（表 1 の②）。本研究では、自分の模擬保育実践による学びを深めるために、何の動きに焦点をあてて運動遊びの指導をするのかを思考しながら指導案を作成すること、模擬保育実践後は、参加した学生からの評価を踏まえて振り返りのレポートを作成することを求めた。これらの自己学習を促す取組みが、運動遊びの指導に対する理解度の向上という学習効果に寄与したものと考えられる。また、本研究では、自分の実践した模擬保育に対する満足度は全体として低かった（表 1 の①）。模擬保育に対する満足度を自己の指導に対する自己評価と捉

えると、模擬保育を実践することを通して、自分が目標とする保育者の運動遊びの指導と現在の自分の指導（模擬保育）との差を自覚したと考えられる。運動遊びの指導力を高める上で、自己効力感を高めることだけではなく、目標とする指導力に対する現在の指導力を自己分析できることは重要なことである。本研究において、運動遊びの指導に対する理解および自己効力感が高まったことを鑑みると、自己の指導力を認識したことが学習意欲となって表れ、学習効果を高めた1つの要因となったと推察される。

また、他者の模擬保育の実践による学習効果は高く、安全管理への配慮、運動発達を促す運動指導、コミュニケーションの取り方のいずれの項目において、その理解度が高かった（表1の④⑤⑥）。この結果は、他者の模擬保育の実践から学ぼうとする姿勢によって得られた効果であると考えられる。本研究では、模擬保育の目標を「運動発達を促す、安全で楽しい運動遊びの指導力向上」と掲げて自他の模擬保育を経験させ、他者の模擬保育実践後に評価票および模擬保育の記録をさせることによる相互学習を促した。これら相互学習を促す働きかけが、他者からの学習効果を高めた要因であると考えられる。

2. 模擬保育の実践による運動遊びの指導力の向上

運動遊びの指導力の変化について、運動指導力、コミュニケーション力、安全管理力に対する自己評価から検討した。その結果、模擬保育実践後は、運動指導力、コミュニケーション力、安全管理力のいずれも模擬保育の実践前よりも有意な向上が認められた（図2）。それぞれの項目別の変化量を見てみると、運動指導では、「①運動発達を促す運動プログラムの立案・指導ができる」の変化量（以下「向上量」と略す）が大きかった（表3）。運動機能が急激に発達する幼児期は多様な動きを身につけやすい時期である（文部科学省, 2012b）ため、運動発達を促す運動プログラムの立案・指導の項目の向上が高まったことはとても意義があるといえる。本研究では、子どもの運動発達を促す運動遊びの指導力を高めるために、何の動きに焦点をあてて運動指導を実施するのかを予め思考するように指示し、模擬保育実践後には、ねらいとした運動の動きをホワイトボードに記入させてクラス全員で共有する時間を設けた。このような授業展開によって、自らの模擬保育の実践だけではなく、他者の模擬保育の実践を通して、運動発達を促すための運動プログラムについての学びを深めたものと考えられる。また、「⑩必要に応じて、適切な模範を示すことができる」の向上量も大きかった（表3）。本研究では、幼児期の運動指導に携わる前に運動遊びに対する理解および遊び経験の蓄積は重要であるとの示唆（池田, 2015）を踏まえて、模擬保育実践前の授業において運動遊びの実践を行った。また、学生は、他者の模擬保育の中で様々な運動遊びを経験した。これらの様々な運動遊びの実践経験によって、学生は模範の示し方を理解し、模範を示す身体的な能力および自己効力感を高めたものと考えられる。櫻木（2016）は、模擬保育形式の運動遊びを導入したことによる効果を14項目で構成された質問紙調査から検討した結果、「動きや遊びのレパートリーが増えた」との項目において「当てはまる」と回答した学生が多かったことを報告しており、模擬保育の中で様々な運動遊びを経験したことによって運動遊びのレパートリーが増える可能性を示唆している。このように、今日の若い保育者の問題として代表されるような、「運動遊びをあまり知らない」、「運動遊びを実施した経験が希薄である」（池田, 2015）といった特徴を持つ保育者あるいは保育者養成校の学生にとっては、運動遊びの実践経験を積み重ねることも運動遊びの指導力向上にとって重要であると言えるだろう。

安全管理力では、「⑤危険防止のための監視救護体制を整えることができる」の向上量が大きかった（表5）。「幼児期運動指針ガイドブック」では、「危険な場所、危険な遊び方等は全職員で共通理解し、誰もが安全な遊び方をしっかりと指導していく体制をつくるのが大切」（文部科学省、

2012b, p.34) との記載があり、安全への配慮は教職員全体で共通理解の下に実施していかなければならないことが示されている。本研究の模擬保育の実践では、2人1組になって模擬保育を実践していること、模擬保育実践中に全ての学生が保育実習Ⅱを経験したことで、保育者間の連携による安全確保の重要性の理解を深めていったものと考えられる。領域「健康」の教科である「小児体育」での学びと保育実習Ⅱでの学びが学生の中で統合化(前原, 2017)された結果であるものと言えるだろう。

コミュニケーション力では、模擬保育の実践前の平均値が低かった「④発言のタイミングや間のおき方がちょうど良い」の向上量が最も大きかった(表4)。小学生から高校生までの学習意欲を高めるためには、適切なタイミングで言葉かけを行うことが重要であるとの示唆(吉川・三宮, 2007)があるが、幼児に対しても同様のことが言えると考えられる。そして、発言のタイミングを適切に行うためには指導の経験や、一人ひとりの子どもを理解しておくことが重要であると考えられる。本研究の模擬保育の実践前のほとんどの学生は、運動指導の経験が乏しく、また、運動中に適切なタイミングで言葉をかけるといったことがイメージできていなかったために、模擬保育実践前の値が他の質問項目より低かったと推察される。そして、模擬保育や保育実習の中で、言葉かけのタイミングを意識し実践できたことによって、発言のタイミングや間のおき方という言語的コミュニケーション力を高めることができたと考えられる。

さらに、本研究では、模擬保育の実践前の質問紙調査の段階では、運動指導力および安全管理力がコミュニケーション力より有意に低い値であったものの、模擬保育の実践後は3者間で有意な差が認められなかった。この結果は、模擬保育を実践することによって運動指導力および安全管理力が顕著に向上し、コミュニケーション力と同水準まで高まったことを示している。本研究の対象者は保育科2年生であり、模擬保育実践前のアンケート調査の時点で、すでに保育実習Ⅰaおよび教育実習を経験していた。つまり、実際に子どもとコミュニケーションをとる機会を多く有していたため、コミュニケーション力に対する自己評価が運動指導力および安全管理力よりも高かったと考えられる。本研究において、模擬保育実践による運動指導力および安全管理力がコミュニケーション力の水準に達したことを踏まえると、運動遊びにおける保育実践力の向上には、実習の経験だけではなく、実際に運動遊びに関わる保育を実践する経験が必要不可欠であると言えるだろう。

3. 今後の課題

本研究では、模擬保育満足度上位群と下位群に分けて、運動指導力、コミュニケーション力、安全管理力の変化を検証した結果、安全管理力の向上率において模擬保育満足度上位群が下位群より有意に高かった可能性が示された(表2)。このことから、運動遊びの指導に対する自己評価を高めることが安全管理力の向上に繋がる可能性が考えられる。模擬保育に対する自己評価には、運動指導に対する意識の個人差や、学生の自己評価と指導熟練者による評価とのギャップが存在すると考えられるため、今後は、学生一人ひとりの模擬保育に対する自己評価を高めるための授業展開を検討するとともに、学生が自己の指導力を正確かつ随時把握できるような「運動遊びの指導力に関するチェックシート」の考案および開発が必要となるだろう。

V. まとめ

「運動発達を促す、安全で楽しい運動遊び」の指導力向上を目標に掲げた模擬保育の実践は、保育者養成校の学生の運動遊びの指導力向上に寄与し、幼児が「多様な動き」および「安全についての構え」を身に付けるための保育実践の一助を担える可能性が示された。

文献

- 池田裕恵 (2015) 幼児期の育ちと運動遊び指導の意義および課題. 子どもと発育発達, 13(1): 9-14.
- 春日晃章 (2017) 第4章 幼児の健康維持・増進のための身体活動. 春日晃章編. 新時代の保育双書保育内容の健康, pp.63-85.
- 小林研介 (2010) 元気な子どもを育てる環境. 子どもと発育発達, 8(2): 89-93.
- 前原 寛 (2017) 学びの統合化を目指して. 一般社団法人 全国保育士養成協議会. 平成 29 年度 全国保育士養成セミナー実施要項, pp.144-145.
- 文部科学省 (2012a) 幼児期運動指針.
- 文部科学省 (2012b) 幼児期運動指針ガイドブック.
- 文部科学省 (2017) 幼稚園教育要領.
- 森谷直樹, 清水桂子 (2006) 学生の保育者力養成における教材「模擬運動会」の可能性. 文化女子大学室蘭短期大学研究紀要, 29: 46-71.
- 坂口将太 (2017) 領域「健康」および領域「人間関係」から見た体育授業における運動遊びを用いた模擬保育の位置づけ. 聖和短期大学紀要, 2: 11-16.
- 櫻木真智子 (2016) 保育専門科目に実践を取り入れることによる学びに関する報告: 「保育内容・健康」に模擬保育形式の運動遊びを導入することの効果为例として. 聖徳大学研究紀要, 49: 127-134.
- 杉原 隆, 河邊貴子編 (2016) 幼児期における運動発達と運動遊びの指導. ミネルヴァ書房.
- スポーツ庁 (online) 平成 28 年度体力・運動調査結果の概要及び報告書について. 体力・運動能力の年次推移の傾向 (青少年), (参照日 2018 年 1 月 9 日).
- 矢野 正, 原田健次 (2010) 幼児体育における模擬保育が学生の気分変容に及ぼす影響. 西山学苑研究紀要, 5: 17-32.
- 吉川正剛, 三宮真智子 (2007) 生徒の学習意欲に及ぼす教師の言葉かけの影響. 鳴門教育大学情報教育ジャーナル, 4: 19-27.